



発行所 磐城日日新聞社 福島県小名浜町湊51 電話代表387番

記者 若干名 見習記者 若干名 業務社員 若干名 磐城日日新聞社人事課

舌端火を吐く 保守言論戦

先ず 候補縣政へ一矢

石城の第一日小名浜會場

知事選挙が相余りに逼迫した終戦後の眞只中、再選を期す大竹、縣政刷新の雄飛を挙げた安田、河川の三候補は石城舌戦の第一日を飾り十五日午後七時小名浜講堂に舌端火を噴く言論戦を展開した

この夜、一千聴衆を前に立会演説のトップは安田候補の演説を聞いて河川候補、無造作に茶色のジャパンで登壇すると、低い座談的な聲が流れた。一人は私の知事選挙候補に氣遣いという氣遣いかどうかは諸氏が判定して呉れ」の冒頭に始まる多辯型低音針による辯論要約は、

△私は課税方針の轉換から縣政に手をつけた。課税制の重点を課税対象の質的なものに置き、大竹候補の矛盾を改革した。△次に地方事務所を全廢して、縣と地方町村に直結させることにより、人的物的諸経費を削減する。同時に副知事を始め無用の長物縣議の数を極減する。縣議は地区別に九名あれば事足りる。△次に自動車である、本縣に六十台も自動車はいらん、バス一台、トラック二台、計三台で譯山だ。縣知事公舎の車も禁止、私が知事になつても勿論専用車など使用せぬ。△今日まで大竹さんは二、三万縣民を救いて来た

ボス政治を打破

無所屬安田候補の辯

第二陣安田候補、甲の近眼鏡、キレに磨かれたレンズ、幅廣い聲で大衆性と革新派の匂いを吐いて一般に期待されたが、講堂内の聴衆に感銘を與えるほどの論鋒成らず。同氏の低調調による、大竹縣政批判と政策主張の辯は、大竹氏は縣議一人に付十二万円の慰勞金を出した皇太子の車は二台で三百万といわれ、一合で三十七万円の高級車、然も縣議に六十台の車が舞い、いて運轉手は将棋をさ

縣民の血の流れの中に私は政治する

自由黨大竹候補の辯

△自由黨大竹候補、私はいはの血、是は、吾小名浜港もその意味に於て將來商工港としての前途は洋々としてをり、同港に一万トンの船が自由に出入港出来る時が本縣の最も隆盛の時である」と信

小名浜市實現へ

近郊町村の活発な動き

小名浜、泉町、湊町の合併による市制施行への機運は、江名町、有識者をいたく刺激し、江名町も此の際大同合併して市制都市に合流して諸施設強化完了。湯本合併は將來とシラミ合せ一應考えさせられるが、小名浜合併ならば全村一致という線が出るものと観測される。と説明しており、町村合併へのあわただしい動きは、小名浜市制實現(年度内)の可能性を時と共に濃厚にしつつ進展して行く実状にある。

植田民生委員

植田町民生委員会の初顔合せは十八日午後一時、町役場會議室に於いて開く。

錦町新設道路入り札

錦町では新工機具羽化成の新設に伴い道路の整備を計畫していたが、このほど土地買収もおわり、三日午後一時より町役場會議室に於いて新設道路の入り札を行った結果、同町高木組(高木好榮氏)に二十万円で落札した。新設する道路は六國國道錦町の錦橋より新工機具羽化成(中田)まで延長八〇〇米で完成は明年三月の予定。

祝 發 刊 滿 三 周 年 記 念 協 賛

- 磐城通運株式会社 泉支店長 小林重三
- 泉農業協同組合 組合長 志賀連
- 植田町営林署 署長 百瀬美佐雄
- 古川酒造店 銘酒 稻万才 釀造元
- 植田教育委員会
- 植田土木監督署
- 植田町商工會
- 石城聯合PTA会長
- 金成源 右衛門
- 金成土建株式会社 代表者 金成泰三
- 菊南工業株式会社 代表取締役 赤津幸之亮
- 錦興業株式会社 取締役社長 佐久間清一

株式会社 小澤商店 社長 小澤榮太郎 勿來町

菊田地区金融團

